



剣持 晶子・絵

「すごい家。ジャングルみたい」

なおは思わずつぶやきました。塀は蔦でおおわれ、中庭は木でいっぱい、足もとには草ぼうぼうです。ここは遠い親戚のお屋敷。おばあさん姉妹が住んでいて、そのお姉さんの方が入院したので、お母さんと一緒に、夏休みの最後の一週間、お手伝いに来たのです。

「古い家だから、びっくりしたでしょ」

妹の方のおばあさんがいいました。真っ白な髪の毛をおかっぱにして、グレーのワンピースを着ています。なおは、出されたアイステイーをあとというまに飲み干して、グラスの底をストローでズーズーやって、お母さんにテーブルの下でゴンッとむこうずねをけられたところでした。

あーあ。せっかくの夏休みの大事な残り一週間、こんな

ぼろ屋敷で過ごすなんて。腰かけたソファーも、革ばりどっしりしていましたが、あちこちやぶれて中身がとびだしています。なんだか家じゅう、がたがたみたいで、うっかり大声でも出したら、たちまち天井ごと崩れてきそうです。ありえない。声に出さずにつぶやくと、お母さんの携帯が鳴りました。

「はい、はい。あらっ。おかしいですね、ええ、ええ」

会社で手違いがあり、すぐに戻るといのです。

やれやれ、おかげで帰れるぞ。なおがホッとしてると、「じゃあ、なお、しっかりお役にたつよ」

お母さんはそう言って玄関に向かいました。

「だって仕方ないでしょ。こちらのお世話、引き受けちゃってるんだから。あ、そうそう」とハイヒールをはき、